

う。
死そのものによつてはじまる何物かがあつた
様に思はれます。私がかうしてあなたのことを
思ひ出して居る時にあなたは記憶の國にめぐめ
て居らるゝのではないでせうか。あなたのお目

には高原の土の中にめぐむ青い小さい命がか
やいて居るのではないでせうか。
命の中に迷ひ啼く小鳥の歌に耳をかたむけて
居らるゝのではないでせうか。

八千代のふみ

きのふもまさら、けふもまさら、
只今にし一つ見えたり
さにもあらず。かしこ

偶感

◎日誌の中より

今朝私の一番うれしい便りがあつた。その中
にこんな歌があつた。小さき詩人の作が。
父上と共に寒さを感じつゝふるへて歸る縁日
の夜
中食に辨當のフタを開き見ばブンと肴の匂ひ
がするよ
自轉車に乗つて轉げてけがをして母に叱られ
こりもせず乗る
日曜日友と遊びに行きし野にハンカチーフを
忘れて歸る
なつかしき家に歸りて只今と一聲いへばペス
も一聲
飛行器のうなりに似たり愛宕山峯の梢に吹く
風の音

庭園の隅に小さき白菊が私の様に咲いて居る
かな
學校より歸りて見れば縁先に一羽の小鳥米つ
ぶ拾ふ
母上のお乳をば見てひとくちをすいたけれど
も今ははづかし
淨瑠璃を習ひつゝある我友が椋から落ちて今
は入院
小さい詩人等は今日も美しい世界で鬼ごつこ
や相撲や兵隊遊びやに夢中になつて居る事だらう
そして、又、私どもの先祖が、したやうに、見
た儘を、思つたまゝを、ひねくりもせず、振り
もせず。極自然な、而も高い調子で歌つて居る事
だらう。

人はいくら良い風な事を云つても依然として自己自身である。一見した所同じ社會に、同じ團體に、同じ家族に、生活して居る様でも、其實は、今一つ小さいソイクル——自己を中心にした好きな半徑を以て描き出した圓——の中で勝手な生活を營んで居るのである。其間で似よつたソイクルの者同志が、握手をしたり、共同の生活をしたりする事は、勿論ありはするが、厳しく云へば、全く各人各別である。そして、奇妙にも、皆がお互に、自分のソイクルが、ベストだと考へて居る。少くも、刹那々に於て、そう信じて居る。——自分のものが「良くないなア」と、氣の付いた時には、既にそれは、自分のものでは、無くなつて居る。同時に自分は、新しい。又ベストと考へられるものに移つて居る。——であるから他人のソイクル等はずんで氣にならない。氣にならないから理解する筈もない。斯うしてお互が最も張りつめた線、即ち圓を以て相接して居るのであるから、誰か退かない間は、隙間だらけである、好意や、愛は、決し

て此の隙間を、渡つて行く事の、出来るものではない。かうなつた勢ひ、人の爲る事が何でもかも、馬鹿らしく見えて、仕様がな様になるのである。従つて其馬鹿らしさは距り隙間に比例する筈である。二二が五となるソイクルに與がつて居る人は、二二が四よりならぬソイクルの人を、動きの取れない話せない人だ」と願みないだらうし。美しい幻の中に、生きてる人を、「あれア病人だ」と、理屈で推さねば承知の出来ない人は鼻であしらつて居るだらう。神の召使であり得る人はガッドドレス、ソイクルに、平然と動いて居る人が、如何にも、みぢめに見えて、あはれみの涙を注ぐだらうが、注がれた人は空嘯いて居る事だらう。老人は燃ゆる様な青年のソイクルを狂人の境だと天窓から、けなしつて口の端にもかゝらぬものにするだらうが、青年の方では又老人を、火の無いストーブと、てんで相手に爲ないだらう。造次顛沛にも此に於てする君子人は、放埒な粹狂者のソイクルに、顔を脊けて人だと云ふ事を恥ちようが、放逸先

生は默然居りて賢するは馬鹿の骨頂、能くみれば、成る程猿にも似て居る。いや、お淋しくないかと、冷笑して居よう。學術研究に没頭して居る人は、それが自分の事であるばかりに、非常識までが、誇りにならうし。文盲者達は「年の功」が鼻に懸らう。世の中の悲しく見える人は笑つて居る人が何だか、泣くすべも知らぬ「おめでたや」の様にくだらなく感じようが、笑つて居る人の方では悲觀する人が可笑しくつて堪まらないだらう。歌が命の人とお金が命の人とは、お互に語るに足りない守銭奴冥加知らずの愚ものだと云ひあつて居るだらう。吝嗇家と浪費者とは地獄に行つて争つて居るのである。こんな鹽梅にしてお互に張り合つて居るのであるが、それが至極眞面目である。確かにそれは、主觀的には、眞なのであるから、そうあるべきである。けれども眞面目であればあるほど傍からみると可笑しい。しかし可笑しいからつて、くだらないものだと云はれないのでお互に勝手な熱を

吹いて暮して行かれるのは實にありがたひ話である。ことに人間よりは少し大いものがあつたりした時にはこの澤山のソイクルの勝手な動ききは實にお愛嬌にも見える事であらう。とに角かうして暮すのか人間らしい所なのであらう。「人が私のソイクルを解釋して呉れさうなもの、これに賛成して呉れさうなもの、或は折れて來さうなもの」

○とお互に待つて居る間は少くも斯うして暮すのであらう。しかし私は張り合はなくなつた世界を想像して見ようとは思はない。

またしても思ひてはみつ去りし我が苦しき事を樂しみの如く。くるしみよとく去れよかし斯く祈り祈りし昨日が可笑しうなりぬ。苦しきもよし悲しみも亦よろし事なき今日の寂々しさよ。あまりにも疾く去りゆきし苦しみの飽かぬ思ひに慕はるゝかな。人しれぬ苦しき事のこの我にありてふそれも誇らひにして。人ごとと思ひし年になりけり悲しきばかり何ごともなく

小ゆび折り年數へては今更にさびしうなりぬ聲
 や立てまし。時折りは忘れやせむと我が年を我
 が名をひとり口ずさみする。火桶などかこみて
 あまた語らへば手の氣にかゝる冬の夜哉。もの
 思ふわれさまたげん何ものどあらずうれしき天
 となりにけり。明日の日はわれ知らねどもしか
 れどもゆきつく迄をゆき／＼てみまし。世馴れ
 たる人のよくするあしらひをそと眞似てわが心
 笑ひぬ。電燈のふと消えてけるたまゆらにうれ
 しくもわきぬ幼き心。つくねんと眺めてあれば
 どもすれば君も見えなく我も見えなく。なにや
 らむものゝ失せたるこゝちする余りに多くかた
 りし我は。口とくもあらがひければわが心うつ
 ろになりぬさびしいかなや。蛇が来る盗人が来
 るとひたぶるに恐ろしかりし夜の口笛。文机に
 雖ならべて友あまたすわれはをいささびしう
 なりぬ。文机に雖段なんごしつらへるしばしの
 我の和げる心。雖祭るかゝるすさびのいつまで
 もうれしといふがうれしかりけり。(破常)

ギリシャの地山高く水清きこゝ今尙千古の
 如し。ローマの府繁榮の津にして文化の中
 心たるこゝ古昔に譲らす。而も古の文化に
 して富強なる民族社會は今何の所にか在
 る。古の猶太國は大民族なり。一度その社
 會組織の滅亡せしより其の子孫離散して世
 界に漂泊す。今の猶太人は智巧人に絶し、
 財力他を壓す。歐洲人の畏れて忌む所たり。
 而も歸するに故國なく他人の國に浮浪して
 其の苛酷なる鞭撻に甘んず。個人智にして
 且つ富むといへども、合同して民族社會を
 成し、其の獨立を維持するにあらざれば、
 以て世界生存競争に對峙する能はざるこゝ
 知るべきなり。—愛國心—(種積八束)

報 録

◎第廿八回文科學術談話會記事

大正三年二月二十一日開催しました。その席
 上で最近歐洲から御歸朝になりました保科先生
 から興味あるお話を承ることが出来ましたこと
 を深く先生に感謝致します。

講演順序

- 一 將來の婦人 保科 先生
- 一 中世の心に就て 文二 荻野よし
- 一 東京市の交通 文三 窪田 けい

本會も次第に發展に向ひつゝあります。自由
 より充實したものにせねばならぬと存じ
 ます。何處にかうつろがあるやうな氣がしてな
 りません。會員諸姉の御努力を切望します。

◎退會者 (文科會賛助員)

阿部 みな 大正三年一月退會

相川 みほ	全
岩井 ます	全
五十嵐せい	全
大野 ゆき	死亡
加藤 雛	明治四十五年退會
白川 まり	大正三年一月退會
篠木 千代	退會
高園 すゐ	大正三年二月退會
中川 いと	退會
濱野 ひで	大正二年十一月退會

◎第七回會計報告

収入 金八拾參圓五拾貳錢

内 譯

金參拾圓貳拾壹錢 前より繰越 高